

て漉事と見ゆ、江戸にて賣所のがんび紙の下品なるは多く三ツ椀にがんびを少し合して漉たるもの也、何れ農家にては餘作をして、定作の外に利を得る事をせざれば、立行がたきもの也、右楮と檀は農家餘作の内にて、利分多き作りものなるべし、

〔廣益國產考〕八、三股を畠地に植益ある事三ツまたはかみをすく木也

三股の苗を拵ゆるには、二月の末苗床をこしらへ、糞水を蒔ちらし、日にさらして打ならし、畦をつくり、麥か綿蒔やうにまくべし、蒔旬は彼岸中より十日位おくれ蒔べし、たねは前年初夏にとりおさめて土をまぶし、俵に入、乾き地の日あたりよき所へ埋置、蒔候時ほり出し、土をはらひ、二三粒宛三ツの指にてひねり、上の皮をむけば、白く實出る也、是をまくべし、生ざる實はひねるに中黒く腐たる如し、扱蒔たる實追々生出たるとき、まげき所は間引捨、小便七分に水分を和して、度々かけて育れば、其年の冬は一尺二三寸、又は貳尺位に伸べし、寒氣強き所にては覆をすべし、翌春三月上旬こぎあげ、植場所にやりて本植すべし、植るには山の裾、又は茨杯の生たるを伐拂ひ植べし、又は山畑などの荒たるを起し植てよし、植付て三年程になれば、凡六七尺にも伸る也、又三尺位に伸ざるもあり、其時は成長したる分、其冬拔伐にすべし、扱伐たるは家に持かへり、四尺位に伐揃へ、末の短きは中に結添、一トだかへ半位の輪に結び楮同様に蒸て皮をむき、干揚貯ひ置、用ふる時水に浸しけづりて河水にさらし、煎てたき紙に漉事は、楮紙に同じ事なれば、爰に略して記さず、

此三ツ股は枝三ツつゝ、出れば、自稱の道理にて呼なしたる名と見えたり、駿州興津由井邊に作り、紙を漉て利を得るよし、又甲州にても漉ぬるよし、伊豆邊にても作りぬるか、あたみより漉出せる雁緋紙に下直成あるは楮皮に此三ツ股を交て漉たるものと見ゆ、江戸にて見及べり、また武州玉川にて和唐紙とて漉出すもの、此三ツ股を用ふると見えたり、